

滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の研究

―伝来についての推測―

公益財団法人秀明文化財団理事 (MIHO MUSEUM 研究・展示担当) / 成安造形大学附属近江学研究所客員研究員

高梨

純次

滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の研究
―伝来についての推測―

公益財団法人秀明文化財団理事 (MIHO MUSEUM 研究・展示担当) / 成安造形大学附属近江学研究所客員研究員 高梨 純次

Name:

TAKANASHI Junji

Title:

An Inquiry into the Wooden Fudō Myō-ō Nidōji Statues of Jōshōan Temple in Aishō-chō, Echi-gun, Shiga Prefecture: Part III of the Study

Summary:

Continuing from the two previous studies, I examined the wooden statue triad of Fudō Myō-ō and two children in the collection of Jōshōan Temple, and focus on the circumstances surrounding its initial construction. Jōshōan Temple was built in the 17th century, and this set of statues, which was created between the end of the 12th century and the beginning of the 13th century, was transferred there from another location. The form and style of this triad suggest it was made by the Kei school and it is similar to the works of Unkei or Kaike. Records show notable artistic activities of the Kei school in the vicinity, including approximately three statues of Fudō Myō-ō in the former Binman-ji Temple in Taga-cho, which today retains the name Binman-ji as a place name. It is speculated that this statue triad was moved from Binman-ji Temple, which fell to ruin at the end of the 16th century, to Jōshōan Temple.

はじめに

この拙稿は、滋賀県愛知郡愛荘町の金剛輪寺の子院として建つ常照庵に伝えられた、木造不動明王二童子像^{〔註1〕}についてこの『成安造形大学附属近江学研究』所『紀要』に掲載していただいた二編^{〔註2〕}を引継ぐものである。最初の論考は、この木造不動明王二童子像の調査結果について報告し、二編目では像についての作風などを比較検討し、中尊像と両脇侍像には厳密な意味での一具性に乏しいとした。造像時期について、中尊像は十二世紀末から十三世紀初頭と考えた。両脇侍像も、その姿勢や視線から想定する配置などからしても、半跏像になる制吒迦童子像については一二二〇年代後半から二二〇年代あたり、保守的な趣のある矜羯羅童子像は十二世紀末から十三世紀初頭と想定した。中尊像と矜羯羅童子像については、製作時期の近さはもとより、顔の輪郭や体の分節表現、衣文の彫り口やアールの連なりなどに親しさがみられるが、一具とするには、なお検討の余地がある。ここでは、基本的に三軀のうち全てに、一具性はないと判断した。

この三軀の表現は、極めて完成度の高いものであり、特に中尊像の表現について、動的な巻髪表現などは、運慶の手になる伊豆・願成就院の木造不動明王像に親しさがあり、その彩色文様についても高野山・木造八大童子像のうち恵光童子像に倣うような性格がみてとれる。中尊像の作者は、基本的に慶派の手慣れた仏師の工房としてよい。両脇侍像についても、作風や特に彩色文様の仕様などからして、基本的に慶派の工房を想定した。

さて、この三尊像が伝えられ安置されている、金剛輪寺山内の常照庵は、創建が江戸時代に下がることとが確実であり、造像時期との間に大きな開きがある。前回でも触れたように、ここには半丈六の大きさになる本格的な木造阿弥陀如来坐像も伝えられている。ここでは、近世における創建時の事情なども考慮しながら、この三尊像の造像時の状況について考えてゆきたい。

一、常照庵の創建

常照庵については、彦根藩家老の木俣清左衛門守安の室で法名常照院の創立とされ、『近江愛智郡志』第五卷に史料も掲載されており、詳しい^{〔註3〕}。元禄九年（一六九六）仲秋の縁起書に、「木俣守安のぬしの、北の御かた、常照院殿の草創し給ふところなり」としている^{〔註4〕}。創建の年次については、承応三年（一六五四）二月十五日付木俣清左衛門守安に

よる「常照院掟之事」写があり^{〔註5〕}、この頃には存在していたとみられる。

木俣清左衛門守安は、天正十四年（一五八六）に生まれ、徳川家康から井伊直政に配属された木俣守勝の養子となり、慶長十五年（一六一〇）に守勝が没してのち、その家督を継いだ。守勝他界後の井伊家仕置に、若年故に守安が外されたことについて、井伊直孝は不満を漏らしていたとされており、その手腕が期待されていた。やがて大坂の陣後には、加増され、筆頭家老として元和偃武以降の彦根藩の安定・発展に尽くしている。木俣家はその後、家中最高の石高、一万石に至る^{〔註6〕}。守安は寛文十三年（一六七三）に没したとされるから、まことに長命であった。その内儀については、承応二年（一六五三）九月二五日付の、木俣守安による「逆修石塔之事」に、「大心院殿応誉源鑑居士（俗名木俣清左衛門尉守安）／常照院殿光誉芳心大姉（守安内女／畠山入菴息女）」（内割書）とある。同日付の木俣清左衛門内儀による「月はい并いはいの事」に「寛永廿年癸未八月十三日」興松院殿入菴宗破居士（ウラニ／施主守安内儀／如此　らせ可有之候）／（寛永廿一年甲申四月十三日）性徳院殿妙安大姉（ウラニ／右同断）／右二本ニハ入御念可被下候」（内割書）^{〔註7〕}にある、興松院殿入菴宗破居士と性徳院殿妙安大姉は内儀常照院の父母と思われる。

これらの史料からして、常照庵は承応二年（一六五三）には創建されていたことになるが、おそらくこの頃に建立された可能性が高い。既述しているよ

うに、常照庵にはこの不動明王二童子像とともに、半丈六の木造阿弥陀如来坐像も祀られているが、阿弥陀如来坐像も十三世紀前期あたりの造像とみられ、ともに重要文化財に指定されている。とすれば、これらの古像は、常照庵創建のために造像されたものではなく、どこかの寺院やあるいは廃寺などに伝えられていたものを移座したということになる。では、以前の安置場所について推測できる手がかりはないのだろうか。

二、常照庵

木造阿弥陀如来坐像からの推測――

本像とともに安置されている、木造阿弥陀如来坐像^{〔註8〕}について一瞥しておきたい（写真4）。

像は、来迎印を結ぶ半丈六の堂々とした阿弥陀如来坐像だが、その構造について特徴がある。それは、頭体幹部を一材製として前後に割って内割りする割矧ぎ造りになるが、左体側の大半も共木として肩で左右に割って内割りをしている（写真5）。同様の仕様になるのは、在銘の金剛輪寺木造阿弥陀如来坐像（木造・漆箔、像高一四一・二センチ）であろう^{〔註9〕}。金剛輪寺像は、貞応元年（一二二二）から嘉祿二年（一二二六）の年記があり、この時期に造像されたと推測される。仏師は近江講師経円で、この仏師は同じ貞応元年に、近在の仏心寺・木造聖観音立像を造像している^{〔註10〕}。その前後関係からい

うに、十月から金剛輪寺像に着手したとみられる。常照庵像と金剛輪寺像は、その体の構えをはじめ、着衣形式などは極めて近いが、反面、髪際のうねりや表情、衣の畳み方の複雑さ、衣文の彫刻などは金剛輪寺像に新しい工夫が認められる。とすれば、このような半丈六像であれば、通例として一ヶ月から二ヶ月で完成できるとみられるが、金剛輪寺像が四年弱の日数を要しているについて、何らかの事情があったと推測される。その割矧ぎ造りの仕様から、常照庵像は、この四年の間に経円が造像した可能性が求められるが、これについて即断はできない。というのも、近年の調査の成果として、同じような仕様の像が確認されている。一つは、近江八幡市西願寺の木造阿弥陀如来坐像（木造・漆箔、像高六九・七センチ）で、像内に文治四年（一一八八）の墨書がある^{〔註11〕}。これに近い大きさの、甲賀市・飯道寺木造阿弥陀如来坐像（木造・漆箔、像高六八・七センチ）は、作風からして十一世紀末から十二世紀初頭の作とやや古いが、これも同様の割矧ぎ造りになるとみられる。

管見に及ぶ作例はこの四軀だが、後二者のようなサイズの像であれば十分に合理的な仕様であり、将来的には確認される事例が増えることになると思うが、現状において検討するならば、常照庵像と金剛輪寺像は基本的に近い工房の手になるものとしてよからう。両者の差異についての厳密な分析は今後の課題であろうが、仏心寺木造聖観音菩薩像の銘記に「今当郡住」と書く近江講師経円の工房とすれば、この近在での造像であろう。仏心寺も金剛輪寺の近

在で、直線距離にすれば北西方向約二キロ以内に位置している。金剛輪寺山内の在銘像は、一二一〇年代から二〇年代に一つのピークがあり、仏心寺像もそのうちに含まれる。常照庵像も、それに近い時期に近い場所で造像されて安置されたと推測される。常照庵の創建時、木俣守安とその内儀は、金剛輪寺山内に伝えられていた像をもって、その本尊として安置したものと推測される。

三、不動明王及び

両脇侍像の所在についての推察

阿弥陀如来坐像と同様に、不動明王と両脇侍像は、どこから移座されたか、造像時当初の所在について検討してゆきたい。本像についてみると、像は

十二世紀末から十三世紀初頭に三軀が建立され、作風や表面の彩色・文様の仕様からして、慶派の工房による造像とみられる。さらに、厳密な意味で三軀の間の一具性は検討の余地があり、少なくとも主尊と制吒迦童子像は別のグループとみられる。つまり少なくとも二組の不動明王と脇侍像があったということであるが、それが金剛輪寺山内に伝えられていたとは思えない。前記したように、金剛輪寺本堂には十二世紀も半ばあたり以降からの諸像が祀られているが、この種、慶派の手になる像は全く確認されていない。そのような中、少なくとも二組以上の慶派の手になる不動明王と脇侍像が祀られていたとは思えないのである。では、どの辺りに伝えられてい

たのかを考えてみたい。

これを考えるための材料として、木俣家とこの地域との関係性について一瞥しておきたい。木俣家の知行については、慶長期（二五九六年―一六一五年）には四千石、大坂の陣後には合わせて一千石が増され、寛文十二年（一六七二）の知行は七千石にのぼっている。その知行地については、詳細な書類が残されており、その数は伊香・浅井・坂田・犬上・神崎・愛知・蒲生の七郡、三六カ村に及んでいる^{〔註12〕}。この知行地の年貢徴収、土地管理、その他の業務を担っていたのは、十七世紀後半には坂田郡新庄寺村の代官であった村崎家であったとされ、この時期にはその土地の有力者との繋がりもあったとみられる。

このような土地、特に金剛輪寺近辺で、十二世紀末頃に慶派が造像していたとみられるのは、多賀町に地名を残す、中世を通じて多くの堂塔が立ち並んでいた敏満寺に思いが至る。

敏満寺については、この地が奈良時代の莊園絵図が残されている、東大寺領水沼庄の故地であり、その方面からの研究がなされ^{〔註13〕}、また近江猿楽の有力な座として世阿弥の『申楽談儀』に登場する「みまじ」座の所在地として注目されてきた。その後、平成七年（一九九五）に敏満寺区の史跡文化保存会より、石仏などが大量に分布している場所があるとの報告があり、翌年より多賀町教育委員会が予備調査を行い、類い稀な規模の中世墓地であることを確認した。以降、測量や発掘調査が行われ、大部の報

告書が刊行されている^{〔註14〕}。敏満寺についての詳細

は、この報告書を参照していただくとして、ここでは触れない。なお、敏満寺に関わる文化財については、この地に鎮座する胡宮神社に伝えられ、重要文化財に指定される銅製五輪塔は建久九年（一一九八）に重源によって寄進されたものとして有名である。尊像については、十二世紀から十三世紀にかけての仏像や神像の存在が知られていた^{〔註15〕}。そこには、明らかに慶派の工房による作例が認められ、敏満寺の復興、というより中世寺院としての発展の礎が重源の介在によって進展し、造像事業についても慶派の介在が明らかとなった^{〔註16〕}。特に、銅造大日如来

坐像は、像の大小は異なるものの、建久五年（一一九四）頃の作となる石山寺多宝塔主尊の木造大日如来坐像や建仁元年（一一〇二）在銘の伊豆山常行堂旧蔵木造宝冠阿弥陀如来坐像など、快慶の手になる像と極めて近い。また、圈内では極めて早い時期の玉眼嵌入像である木造地藏菩薩半跏像など、新しい技法や作風になる慶派の像なども伝えられており、本像との関係を伺うについても極めて興味深い。

敏満寺の寺観については、後世のものながら「注進 当寺堂塔鎮守目録所」が記録されている^{〔註17〕}。そこには「本堂七間（本尊大日／並観自在尊）（へ）

内割書」から始まって、三重塔・如法堂・観音堂など二十字を中心として、南谷に十二字、西谷に十四字、尾上谷に十字が記録されている。敏満寺が建っていた、胡宮神社の神体山とされる青龍山の北から西麓にかけて、胡宮・南谷・北谷・風呂谷・西谷な

どが小字として残されている。また発掘成果などからして、現在の名神高速道路多賀SAの東西、特に東側に主要な寺院の集合がなされていたと考えられている^{〔註18〕}。この目録によると、中心伽藍には五大尊堂があり、南谷の西福院には「本尊阿弥陀三尊／并不動毘沙門」、西谷の光明寺に「本尊不動弥陀」と、主要尊としても不動明王を安置したとみられる記載が複数にのぼっている。石仏谷の墓跡の様相からしても、鎌倉時代から室町時代には極めて有力な寺院として繁栄していたとみられるが、十六世紀あたりより衰亡に向かい、やがて織田信長の攻撃によって焼亡したとされている^{〔註19〕}。発掘の成果からも、十六世紀後半あたりに、防御施設を備えた城郭化が進み、その後焼亡したとされている。近世の太平の世になると、「多賀胡宮福寿院」^{〔註20〕}がその跡を担うこととなり、残された堂舎の維持管理や残された尊像の安置礼拝を行うが、時として尊像が盗難にあうなどの没落ぶりであった^{〔註21〕}。

十七世紀に至って復興されたとはいえ、その様相は昔日の繁栄に遠く及ぶものではなかった。まことに唐突な推量にて恐縮ながら、このような寺勢の様態からして、木俣守安の内儀による寺院建立に際して、これら敏満寺に伝えられた慶派の作になる不動明王像と脇侍像は、常照庵に移座されたのではないかと思われる。木俣家の所領として、敏満寺の地が直接に入っているわけではないが、犬上郡尼子村は敏満寺の西に近接し、大尼子村は北に接している。特に後者、大尼子郷については、元徳元年（一三二

九）より、地頭代盛による敏満寺への押妨が記録されており^{〔註22〕}、寺勢が盛んな時代においては、寺領の一部となっていたとみられる。このような散在する木俣家所領の周辺で、慶派の手になる不動明王と二童子像が、複数存在していた場所を求めるならば、敏満寺は恰好の中世寺院であり、その退転を想像するに、常照庵の創建に際して、優れた尊像が新しい信仰の場に移され、そこで再生されたのではないかと想像されるのである。

結びにかえて

拙稿は、三稿に及んで、鎌倉初期の慶派による優作である常照庵の木造不動明王二童子像について述べてきた。敏満寺については、既にいくつかの駄文を発表しているが、近江の中世彫刻を考えるに際して、見逃せない重要な寺院であり、様々な視点よりの研究が求められていると思う。近江国の質・量ともに豊かな尊像は、近世の太平の世の到来とともに、戦国乱世によって壊滅の危機に瀕した杜寺の復興・再編とともに、大きな変動を経験したのではないかと推測している。常照庵と敏満寺を、単純に結びつけるについては、色々とお叱りを受けることと思うが、彫刻史研究の今後の課題として、近世社会における尊像の伝承について意を用いる必要性を感じた故に推量を及ぼしてみた。先学・識者のご叱正をお願いしたい。

【追記】

この稿をなすについては、常照庵・金剛輪寺住職濱中大樹師、ともに調査を行った和澄浩介（滋賀県立琵琶湖文化館）、三井義勝（愛荘町立歴史文化博物館）、桑原康郎、一村武司、辻上祐貴（以上MIHO MUSEUM）の各氏より、ご高配を賜った。一部の史料については、彦根城博物館渡辺恒一氏のご教示をいただいた。

不動明王二童子像の写真については小池澄男氏（MIHO MUSEUM）撮影のものを、木造阿弥陀如来坐像については故寿福滋氏撮影の写真を掲載した。

註

1. 木造不動明王像は木造・彩色・玉眼、像高一〇八・五センチ。制吒迦童子像は木造・彩色・玉眼、像高三六・七センチ。矜羯羅童子像は木造・彩色・玉眼、像高五四・〇センチ。
2. 高梨純次「滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の調査報告」『成安造形大学附属近江学研究所 紀要』第十号 二〇二一年
3. 高梨純次「滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の考察―常照庵の木造不動明王二童子像の研究Ⅱ―」『成安造形大学附属近江学研究所 紀要』第十一号 二〇二二年
4. 『近江愛智郡志』第五卷「第十章 秦川村 常照庵」の項。

『第十章 秦川村 常照庵』所収『近江愛智郡志』第五卷 金剛輪寺文書

5. 「第十章 秦川村 常照庵」所収『近江愛智郡志』第五卷 常照庵文書
6. 母利美和「第二章藩政の成立と展開 第三節家臣の家のしくみ 木俣家の家のしくみ」(彦根市史編集委員会編『新修彦根市史第二巻通史編 近世』二〇〇八年)。以下、木俣守安に関わる記述は、この研究によっている。
7. 「第十章 秦川村 常照庵」所収『近江愛智郡志』第五卷 常照庵文書
8. 阿弥陀如来坐像は、木造・漆箔、像高一三八・三センチ、平安時代、重要文化財。参考文献としては、寺島典人「十九 木造阿弥陀如来坐像」(秦荘町史編集委員会『秦荘の歴史 第四巻 資料』二〇〇九年)、高梨純次「三九 阿弥陀如来坐像」(神仏います近江実行委員会『特別展 神仏います近江』展覧会図録 二〇一一年)など。
9. 「二〇九 阿弥陀如来像 金剛輪寺」副島弘道『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 四』中央公論美術出版 二〇〇六年
10. 「九六 聖観音菩薩像 仏心寺」高梨純次『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 四』中央公論美術出版 二〇〇六年
11. 「滋賀・西願寺阿弥陀如来坐像について」桑野梓『佛教藝術』三三二 二〇一四年
12. 「御知行所物成帳」二四八村崎家文書『新修彦根市史第六巻 史料編 近世 一』所収 彦根城博物館所蔵
13. 「敏満寺跡発掘調査報告」弥永貞三『滋賀県史跡調査報告 第十二冊』滋賀県教育委員会 一九六一年
14. 弥永貞三『奈良時代の貴族と農民』一九六六年 至文堂
敏満寺公民館『敏満寺史』一九七六年
多賀町教育委員会『敏満寺遺跡石仏谷墓跡』サンライズ出版 二〇〇五年
15. 文化庁『湖東地方の文化財』一九七五年
「滋賀・多賀町の仏教彫刻―真如寺と敏満寺大日堂を中心に」斎藤望『佛教藝術』一九三 一九九〇年
多賀町教育委員会『多賀町文化財調査報告書 第一集 考古・美術工芸品』一九九一年
16. 「滋賀・敏満寺大日堂銅造大日如来坐像と敏満寺の鎌倉復興」高梨純次『佛教藝術』二一五 一九九四年
17. 「胡宮神社文書 一」敏満寺事書 所収『多賀大社叢書 諸家篇 一』
18. 「敏満寺とその周辺の遺跡」音田直樹『青龍山 敏満寺と東大寺』展覧会図録 多賀町歴史民俗資料館 一九九二年
19. 「胡宮神社文書 十一 川瀬右近覚書(延享三年四月)」『多賀大社叢書 諸家篇 一』
20. 「胡宮神社文書 二一 福寿院口上書之覚(安永四年四月)」『多賀大社叢書 諸家篇 一』
21. 高梨純次 前掲論文(16)
22. 「胡宮神社文書 一」敏満寺事書 所収



写真1 木造不動明王立像



写真2 木造制吒迦童子半跏像・右脇侍



写真3 矜羯羅童子立像・左脇侍



写真4 木造阿弥陀如来坐像 常照庵



写真5 阿弥陀如来坐像 像底